



最後の作品「乙女峠」

二つの永井隆記念館③

長崎の永井隆記念館 入り口の左に「帳方(ちようほう) 屋敷跡」と書かれた石碑が建って

いる。豊臣秀吉に始まり、徳川幕府はキリスト教を激しく弾圧した。一

六四四年に最後の宣教師が殺され、日本には一人の司祭もいなくなる。禁教令にもかかわらずキリシタンの町として栄えた長崎。しかし一六一四年の徳川の禁教令以降、取り締ま



長崎の記念館前の石碑

りは一段と厳しくなる。

教会で働いていた浦上村の孫右衛門は、このままでは日本にキリシタンはいなくなると思

い、密かに戸別訪問して全村民を説得し、信仰を守るための潜伏

組織をつくる。教理、教会暦、祈りを忘れない

よう教え伝えるための指導者を置く。その

者は組織者名簿や規則などを記した帳簿も保管したので「帳方」と呼ばれた。

初代の帳方には孫右衛門が選ばれ、以後七代にわたって孫右衛門の子孫が選任された。

「帳方屋敷跡」の石碑には「孫右衛門から吉蔵まで七代の帳方がここに住んでいた」とある。

なぜ永井隆記念館にこの石碑があるのか。実は最後の帳方、吉蔵のひ孫が永井博士の妻、緑夫人なのだ。永井博士は高校まで島根

県で過すが、大学は長崎医科大学。その

際、下宿したのが緑夫人の家、つまり記念館が建てられている所にあつたのだ。

潜伏キリシタンの末裔（まつえい）である緑さんと結婚することになり、二十六歳でカトリックの洗礼を受け、二カ月後に結婚した。結婚するために洗礼を受けた感がある

が、彼の信仰心が並のものでないことは残された彼の作品を読めばわかる。

その一つ「乙女峠」は彼の最後の作品。乙女峠は彼が生まれた島根県の津和野にある。

一八六八年（明治元年）浦上の潜伏キリシタンが逮捕された（浦上四番崩れ）と呼ばれる。鎖国政策が改められ、再び外国人宣教師が来日したが禁教令はそのままで、逮捕された潜伏キリシタン三千

四百十四人は全国の二十一藩に流配された。その中の百五十三人が津和野の乙女峠にあつた魔寺に入れられ、婦

郷が許されるまでの五年の間にここで三十六人が殉教した。

津和野に流配された者の中に高木仙右衛門と守山甚三郎という有能なリーダーがいた。二人は生き延びて浦上に帰り、津和野での出来事などを「覚書」として残した。永井博士は自分の出身地・津和野での殉教の出来事をこの覚書など呼んで「乙女峠」に書いた。

殉教地、乙女峠は有名になり、毎年五月三日の乙女峠祭には全国から大勢が集まる。殉教者の中に守山甚三郎の弟、十五歳の祐次郎がいる。彼は息を

引き取る前に甚三郎に「結婚して、子供の一人は神父様にしてくれろ。やっぱり教理をよ

う知つたらんと信仰も弱かけん」と言う。甚三郎は弟の遺言を守り、長男の松三郎を苦勞して神学校に入れ、守山松三郎神父が誕生する。実はこの神父から永井博士は洗礼を受けたのだ。

帳方屋敷跡に建てられた記念館や博士が書き残した乙女峠は、信仰の数々の点を線で結んでいるように思える。それにしても三十六人が死んだ残酷な拷問、「乙女峠」を涙して読んだのである。

永井隆著・津和野町の殉教者物語「乙女峠」

津和野の殉教者物語 乙女峠 永井隆著



永井隆著・津和野町の殉教者物語「乙女峠」